“言葉・身体・環境”テーマ鼎談

文化人類学者・今福龍太さん、詩人にしてフランス文学者の吉田加南子さん、能楽師ワキ方の安田登さんによる2009年「山のシューレ」の締めくくりです。

"言葉・身体・環境"を巡る三人の対談は、今福さんの「闇」を実感する感覚の話から始まりました。何年もずっと続けている「奄美の島々を渡りながらの巡礼」や「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」という「暗闇のなかで会話をしたり、食事をしたりする」さまざまなご体験を引きながら、今福さんは概念的な「闇」ではなく、私たちが日常どのように本当の「闇」を経験しているだろうか、と問いかけられます。

"闇"の豊かさから"環境"に触れ直す

「"ダイアログ・イン・ザ・ダーク"のような実験的な試みを体験すると、暗闇で感覚が混乱することや、いかに私たちが暗闇を知らないかが体験的にわかります。ところが、奄美の離島で自然の暗闇に出会うと、言葉や概念で"闇"というのとは違った、本当の暗闇に突き当たる。そして、それがじつに豊かなものだと気づくことができる。観念的で平板なものでなく、多様な質感、さまざまなゆらぎがあります」。

今福さんは続いて、奄美の豊穣な"闇"についてのご自身の文章を朗読して、闇がもたらす感覚を具体的に伝えてくださいました。

「…(略)。少しずつ足を前にだし、つまずく事を恐れて両腕の先を、行く手の闇に向けて、ぎこちなく差し出すと、不思議なことに闇に感触が現れ出す。表れては消える凹凸が、ときに柔らかく、ときに固く、かたちを変えながら足先でうごめき、手先に広がる底なしの闇に、温度や湿り気が感じられてくる。冷たい空気の層と、温かい空気の層とが交互に現れ、目の前の闇は不可視の縞模様を描き出す…(略)」

"闇"はただの状態ではなく、感覚の変化や時間の推移を伴う、できごととしての実態として立ち現れてきます。ついで、島の生活のなかにある闇に関わる身体感覚の言葉がいろいろと紹介されます。

夕暮れが近づいてものが見えなくなる「ゆうまぐれ」。夜になって暗闇になってくることを言う「くらすぃん」は、暗い隅っこを意味すると同時に、夜の闇全体をいう集合的な言葉でもあるそうです。「くるだんど」という奄美の民謡を島の言葉で朗読して、雨雲の到来を告げる歌が愛しい人が泣いている涙を意味する歌でもあり、さらにそれは農作のための雨の恵みを願う雨乞いの歌でもあること。雨雲で空が暗くなることは、雨の到来を意味する喜びでもあると、"闇"が孕む多様な意味を考えたい、と結ばれます。

詩の"言葉"によって共同体の記憶と出会う

詩人の吉田加南子さんは、詩がご自分にとって大切な出会いの場所であると、詩の言葉の世界を案内してくださいました。

「ある歌があって、ひとりの心、ひとりの声ではなくて、複数の声が響き合う。ここにいる私だけでなく、いないあなた。人間と同じ言葉を所有していない空、木とか複数の声が響き合う。声は、言葉になる声だけではなく、人間の言葉だけでなく、沈黙、聞こえない声、これも声、詩の声だと思う。いまここに生きている私たちだけでなく死者の声も、目には見えない存在の声。未来のひとたちにも詩は開かれている。過去、未来、目に見える、見えない、さまざまな人に開かれている場所が詩である」。

さらに石川啄木やボードレールを引きながら、詩がより深く世界をのぞく「窓」であり、「裂け目」であり、自分の身体や存在を前へ進ませる「愛」や「祈り」であると、詩の言葉がもつ豊かで多様な力について思うことへ、分け入っていきます。

「言葉そのものは、私が使っても、私だけの言葉ではなく、ある共同体の価値観や文化、教養、生活、そして感覚、それを共有している人々の生活が積み重なって、今の言葉があるわけです。言

葉を使う、出会うということは、今福先生が美しいかたちで紹介してくれたように、意識しなくても、共同体の記憶と出会っているのだと思う」。

お話は今福さんのお話の奄美の生活のなかの"闇"から、"光"についての言葉の語源、東が「日に向かう"日向・ひかし"」であり、西が日の入る方向から「日の入りを表す"いりおもて・西表"」だったこと、などへと展開されます。

ついで、詩との出会いを 2 つのエピソードで明かしてくださいました。詩を書き始めたきっかけとして、「何をしていいか、なぜ生きているのか」に悩んでいた 20 代の頃、アンドレ・デュブーシェという詩人との出会いを「私はこのひとに出会ったことで救われた。生と死は、裏表です。どういう経験をしようと誰かの不在に立ち会わざるを得ない、いないものとは断絶していて、語ってくれない。だからこそ聞くことができる。という詩に出会った」と語られます。

もうひとつは、父親が戦争中に戦地で戦友への思いを書いた詩が身のまわりにあったことだと言います。

「子どもの私は、現実として生きている存在のはずなのに、詩のなかの今いない、海の彼方の人たちから見つめられている。虚と実の、虚の人たちが私を見ていて、実の私の方が虚であるような感覚をずっと抱えていました。20 代のある経験で自分がいわば破れ、はじけた時に、詩しかないと思った。人に見せることなく書いていた詩、それがよりどころ、と。詩を書くこと、すばらしい詩に出会うことによって、文字どおり救われました。死者との出会い、死者の記憶、そして未来の人たちや未来の空との出会いの場所、それが詩であり、複数の声を響かせることが詩の仕事であると思います」。かつて『闇』という詩集を出されたことに触れ、その後で白川静の漢字の話から、"闇"の門構えが社、つまり神が訪れる場所を意味すること。神の声が社では人間の言葉としてではなく、音や声として聞こえる。音(おと)ずれる場所であること。そうした「神が何かを語りかけてくるのは暗くなってからなので、闇という意味を持ったこと」を知ったと、お話を"闇"につながれて、詩を朗読されました。

詩集『闇』から。「闇がさける/さけた底であなたと会いたい」「闇/みちです/じぶんがじぶんをさかのぼるための」「闇/光のたまごを身ごもるために」「透明な闇が/どうして/ないことがあるでしょうか/闇がじぶんをふりかえるとき」「闇/おわりからしかはじまらない?」「闇/あとになれないものの/でも/あと」「闇/愛/こたえではないのです」「闇のおわり/はじまりです/でも/何の?」「闇/それが星です」。

時間を往還する能のワキ方の"身体"

安田登さんは最初に、前日、前々日と二期倶楽部の能舞台である七石舞台で、吉田さんが作った即興の詩を謡いながらおこなった能のワークショップについて、その様子をご紹介くださいました。

「私が詩を読んでいる間に、皆さんには自由に動いてもらいます。詩と詩の間には数分間の間をあけるが、そのあいだに方向は変えていいけど、足は動いてはいけない。そうすると、ふだんは聞こえない川のせせらぎが聞こえる。鳥や虫の鳴き声も聞こえてきて、ほんのかすかな木々のざわめきも聞こえてくる」。

ついで、藤原定家の能のストーリーの紹介に入られます。

「能には現在能と夢幻能があります。前者は勧進帳のもとになった『安宅』など、現実の人物が主人公。後者の夢幻能は、主人公が幽霊か、神様か、精霊です。『定家』という能の紹介です。

藤原定家が謳ったうたがある。"見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ"。一度イメージした桜や紅葉、そのイメージの奥に、秋の夕暮れが訪れてくる、ということを謳っている」。

身ぶり手ぶりを交えながらの「定家」のお話は、あたかも舞台で演じられているかのようです。続いて、能のシテ方、ワキ方の違いに触れながら、ご自身がつとめるワキの役が物語のなかで時間を往還する存在であり、ご自身がワキの在りようを実感した体験を語られました。

「ワキとは、身体の前と後ろをわける部分を言います。先ほどの吉田先生のお話にもありましたが、生きている人と死者、両方に出会えるのがワキの役。じつは私はとても親しい人が亡くなった時と、自分が吐血をした体験で、この能の構造がはっきりわかりました。

能のなかには、シテの時間とワキの時間の二つがある。ワキは昨日、今日、明日、過去から未来へ行く時間です。シテは逆。どんどん過去へ遡る。たとえば"定家"では、女性がどんどん式子内親王の時代へお坊さんを連れて行こうとする。この二つの時間が流れて、ある時一致する瞬間がある。どういう時かというと、実は私は式子内親王の亡霊かもしれないと告白する時で、この時に、今が消滅して、昔になってしまう、その時です。

彼女は昔の人なのか、そうではない。なぜなら、能がつくられたのは室町時代です。室町ですら式子内親王は過去の人。逆にいうと、百年後、千年後にも彼女は現れます。実は彼女は、過去ではなくて永遠から来ている人なのです。

このことを私はとても親しい友人のお通夜にいったときに、強く感じました。お通夜には二つルールがあって、一つは文字どおりの通夜。もう一つは死者のことを大声で話す。その友人とは保育園から一緒の仲だったが、どんどん話が過去に向かっていくのです。

つまり、シテの時が始まる。午前四時くらいになって、ふと目を閉じると、夢に彼が現れるんです。能がそこに現れるわけです。そこで私は、その頃吐血したこともあって、あっ、自分が死んでもこんな風に語られるのか、お盆になればこんな風に呼んでもらえるのか。そんなことを実感しました。私の話は終わりです」

それぞれのお話の後には、休憩を挟んで、今福さんの友人の写真家による奄美の風景写真の映像が紹介されました。安田さんもしばしば奄美へ出かけていることから、島の聖地について、不思議な響きがするホノホシ海岸についてなど、あれこれとお話が弾みます。お能から旅のこと、土地の物語、聖地のこと、声と文字の話へとさまざまな文化を巡って奥深く、話題が尽きません。

最後は安田さんが今福さんから所望されて能の所作を実演され、吉田さんが二期倶楽部で作った詩集から、作品『愛』を朗読してくださいました。言葉と身体と環境について、それぞれが映像、所作、声などを多様に持ち出されて、次々にイメージを重ねてくださいました。しばしの精神の旅を共にしながら、音楽のように響く、興味深いお話をうかがうことができました。